

【編集・発行】

茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市文化資料館

〒253-0055

茅ヶ崎市中海岸 2-2-18

TEL&FAX: 0467-85-1733

茅ヶ崎 自然の新聞

平成19(2007)年11月号【277号】

4 ヶ月ぶりの発行となりました。今回の「茅ヶ崎自然の新聞」は、7月以降に投稿いただきました記事を掲載しておりますので、記事が書かれた時期と11月現在とは、気温などの環境が異なりますことをご理解いただき、ご覧いただければと思います。

前号の発行以降、夏休み自然教室の実施やその他多くの文化資料館の事業が続いたため、編集作業が遅れてしまい、投稿していただいた皆様、発行を楽しみにしていただいていた皆様にはご迷惑をおかけいたしました。

また今号の発行に際し、1面をリニューアルしました。「読みやすく」をテーマに、デザインの変更を行い、「もくじ」や「トピック」などの欄を設けました。

今後も日常生活の中で気づいた小さな自然に関する情報などをお寄せいただき、市民の皆様と一緒にこの新聞を作り上げていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(文化資料館 須藤 格)

自然の新聞の記事募集！

「茅ヶ崎 自然の新聞」では、みなさまからの記事や写真の投稿をお待ちしております。メール、ファックス、お手紙等でお寄せください。

小中学生のみなさんからの記事もお待ちしております。絵やメモなど、みなさんが茅ヶ崎の自然について気づいた、感じた小さなことをおしえてください。よろしくお願いします！

〒253-0055 茅ヶ崎市中海岸2-2-18 茅ヶ崎市文化資料館「自然の新聞」係まで

ファクス：0467-85-1733 メール：shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp

主な記事

ちがさき自然情報・・・2

花ごよみ・・・2, 3, 5, 6, 14

宝永山噴火の砂・・・4

カワセミの親子・・・9

台風9号関連・・・12

コラム・・・・・・・・・・15

アメリカトゲミヂク・・・15

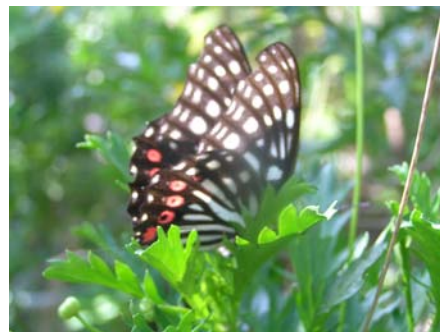
黒潮の運んだ海外土産・・・15

茅ヶ崎の小さな森・・・17

案 内・・・・・・・・・・18



アオダイショウ・・・8



アカボシゴマダラ・・・13

<http://city.chigasaki.kanagawa.jp/shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp>

資料館へのメールはQRコードから➡



Nature Of Chigasaki In Brief

ちがさき自然情報

5月の柳島の花ごよみ

5月8日、柳島海岸の花ごよみに出かけました。河野、吉田、石井に加えて「ゆいの会」の石黒さんと内田さんが参加してくださいました。天気は良く汗ばむ程の中、出発しました。

先月、星状毛に覆われ真っ赤だったアカメガシワの新葉は、しだいに葉緑体の緑色がまじって、抹茶チョコレート色の葉になりつつありました。新葉が赤や黄緑に萌える時がすぎ、サンゴジュ、シャリンバイ、ネズミモチ、オオバイボタ、タブノキ、スイカズラなどは花のつぼみがふくらみ始めていました。シャリンバイ、スイカズラ、トベラは、ちらほら花が咲き始めているのもありました。

タブノキの下の地面には、茶色の冬芽の片鱗が一面に落ちていました。その中に薄ピンク色をした細長い葉がたくさんまじっているのは苞葉でしょうか。

しばらく行くと、小さな白い花で地面がおおわれていました。見上げるとツルウメモドキの枝が見えました。手に取るとツルウメモドキの雄株でした。その先50m程のところに、今度はツルウメモドキの雌株があり、雌花が咲いていました。雌花はあまり落ちずに枝についていました。

ヤマグワは白緑色から赤色の実をつけていて、1、2ヶ月先にはつまみ食い期待できそうでした。

キャンプ場の中で、石黒さんと内田さんがハマカキランを5、6株見つけました。7月ころには花が咲くでしょう。

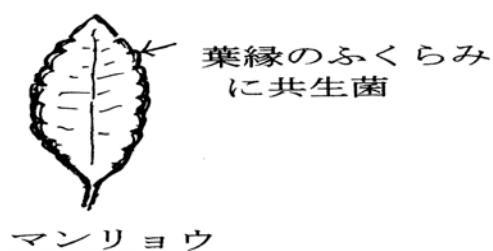
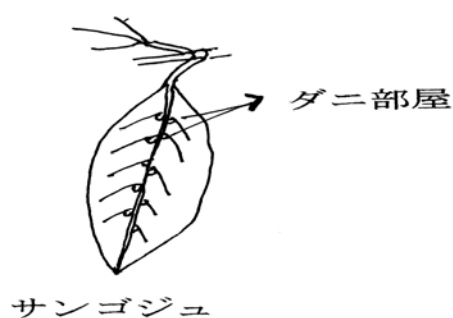
キャンプ場の中に数十株あったセンダングサがいくらさがしても見つかりませんでした。絶えてしまったのでしょうか。

茅ヶ崎市内でセンダングサが生育しているのはキャンプ場だけ、と言われているので、これからは注意深く探さなくてはなりません。私たちが通称「サーキット広場」と呼んでいる所では、ハマダイコンとハマエンドウの群落に花が咲いていました。

今回の花ごよみで、サンゴジュの葉の主脈と側脈の交点の腋が、必ず裏側に小さくふくらみ、裏側はへこんで毛がはえているのに気付きました。意味もなくこのような形になることはないのではないかと気になったので、家に持って帰って顕微鏡で見えてみると、400倍でやっと見える楕円形の緑色っぽい微生物がレンズの視野の中だけでも100近く動いているのが見られました。目盛りを見ると、1～2 μm (0.01～0.02mm) といった大きさでした。

よく言われるクスノキのダニ室も観たところ、とてもよく似たやはり1～2 μm の微生物がいました。

※1 μm = 1/100mm



ビナンカズラも葉脈の交点がふくらんでいるようなので観察すると、少し大きくて2.5 μm (0.025mm) 程の微生物が動いていました。家にマンリョウがあるので、マンリョウの波うつ葉縁あるふくらみを観察した結果、少し大きく3 μm (0.03mm) 前後の楕円形ではなく細長いものが一面にうようようごめいているのが見えました。

数日後、生命の星・地球博物館の菌類の観察会で出川先生にお聞きしたところ、サンゴジュ、クスノキ、ビナンカズラはやはりダニの仲間で、マンリョウは共生菌でチッソ固定をしているそうです。

それからというものの、少し葉脈の交点があるふくらんだ葉を見ると顕微鏡で観察する癖がついてしまいました。エゴノキの葉にもたくさんのダニが住みついていた。

（東海岸南 石井準子）

小出川の花ごよみとバードウォッチング

5月22日、晴れ。初夏を感じる陽ざしの中、気持ちよい小出川沿いを、浜園橋から萩園橋の少し上流まで歩きました。

茎の中空のハルジオン（ハルジョオン）と、中空でないヒメジョオンとが今の季節には混在して咲いています。ネズミムギ、イヌムギも場所を大きく陣取っています。いつも歩いている足元がちょっと変わっています。去年までは、オオバコの銀座並木のような足元が、今年はヘラオオバコのグリーンベルトに変わっていました。素敵なグリーンベルトに見えましたが、ヘラオオバコの繁殖力に驚きました。

またヒルガオの茎にヒシがないこと、アカツメクサの花穂の下には、托葉がある事を確認しました。去年、キランソウの咲いていた場所を、4月に捜しても見つけれなかったのですが、今回5株ほど見つけることが出来てホッとしま

した。

浜園橋からすぐ上流の右岸はカントウタンポポが健在で、「ガンバレよ」と声をかけたくになりました。コウゾリナ、ニワゼキショウ、キュウリグサ、セイヨウカラシナ、オニタビラコ、カタバミ、アカバナユウゲショウ、ツメクサ、シロツメクサ、ギシギシ、コマツヨイグサ、クサイ、イヌガラシの常連の草花も咲いています。

萩園橋の上流と養護学校の間の草むらのところで、仲間が珍しいものを見つけました。この辺ではあまり見かけなくなったというアゼナルコ（カヤツリグサ科）です。私は初めて見る事が出来て嬉しかったです。定点観察の大切さを感じました。

冬鳥たちが北へ帰り、静かな水辺で水浴びをしているハクセキレイが気持ちよさそうです。天気もいいのでバードウォッチャーにも何人か出会い、情報交換をすると、2羽のコガモが帰らないでいると聞きました。見ると確かに2羽が板切れの上で休んでいました。何だか寂しそうに見えて、「何で皆と帰らなかったの？」と聞けたらなと思いました。

普段あまり見かけない鳥で、イソシギよりクチバシが長く、体も少し大きめで、飛んだ時に次列風切に白線がなく、足は黒っぽく、多分渡りの途中のクサシギではないかと思う鳥を2羽見かけました。

今日も新しい出会いに心躍ったひと時でした。



（東海岸南 石井準子）

富士宝永山噴火の砂 香川諏訪神社の境内で発見

6月2日（土）、香川諏訪神社例大祭のための準備を行いました。拝殿前に大幟を立てるために土台を埋める穴を掘りましたが、昨年よりやや南に寄って穴を掘ったところ、地表から約40cmの深さのところに富士砂の層がありました。厚さは5cmくらいで、写真のように下の層は粒が粗く、上の層は粒が少し細かく、色が違っていました。



この場所より北へ20mのところにある庚申塔の前に柱を立てるため、穴掘シャベルで深さ50cm程の穴を掘りましたが、富士砂は出てきませんでした。幟を立てる所より50cmくらい高くなっている土地なので、もっと掘れば出てくるかもしれません。

なお、この諏訪神社の丘は、湘南砂丘列の一つで、海岸から数えて第6列目にあたります。たしかに、上の富士砂の下層はきれいな砂でした。

また、香川に田んぼがあった頃、田の

まん中や端には畑があり、「中島」もしくは「しま」と呼んでいました。玄瑠寺の北の田んぼは「てらしたの耕地」と呼んでいましたが、そこにある「中島」は宝永山の噴出物を集めたといひ伝えられているそうです。

香川の「てらしたの耕地」以外の「なかしま」も、多くは富士砂の集積地と考えられます。



写真撮影・提供：坂井源一
（香川 池田卓郎）

アノマテカ

3年ほど前から、東海岸の砂防林の中にある、オオムラサキの植え込みの根元に、可憐な花が咲き6月になると目を引く。毎年デジカメで接写撮影するのだが、いつもブレてしまい、今年は初めて人に説明できる写真の撮影に成功した。Yさんに写真を添付したメールを送り、「どなたか判断できる方を探してください」と伝えた。

翌朝、「昭和56年出版の主婦の友社の『365日の園芸百科』にアノマテカという見出しで南ア原産の植物が載っている

のでそれではないか」とメールをいただいた。花卉の色は異なるが、早速平塚市博物館の浜口館長にメールで確認をしていただいた。私は葉や花のつき方からラン植物と思い込んでいたが、浜口氏から「これはアヤメ科の植物で和名ヒメオウギと呼ばれるもののようです。」と回答をいただいた。写真を掲載いたします。



（菱沼海岸 井川洋介）

【資料館コメント】

「アノマテカ」、「ヒメオウギ」は、園芸植物としての流通名であると資料館では把握しております。共にアヤメ科の植物と分類されており、「ヒオウギ」や「ヒメヒオウギアヤメ」などとも呼ばれています。

（文化資料館 須藤 格）

6月の柳島の花ごよみ

6月5日、曇。参加者は齋藤、石井、河野、石黒、吉田。

入口のサンゴジュは蕾つぼみがたくさん付いている。少し先に行けば、もう満開に近いものもある。

ヒルガオの花が2つ、きれいに咲いていた。ヒルガオは、この辺りに多いコヒルガオより花は一回り大きく、葉は尖っていない。

ネズミモチの仲間のトウネズミモチと

オオバイボタの判定に迷う。今、満開で香りも強く、葉を日の光にかざすと両方とも葉脈が透けて見える。葉の形が少し違うようだ。また、ロート形の小さな花の筒部がオオバイボタの方が長く、花の裂片の2倍あるという。葉の形、花筒の長さなどからオオバイボタと判定した。オオバイボタは海岸付近に多いという。

この道にはシロバナマンテマが多い。もう花よりも実の方が多い。キャンプ場内は赤いマンテマが多く、今ちょうど花ざかりだった。両方とも全体が粘つく。

また、この辺の道端にアレチギシギシが多い。ギシギシと見た感じが違うが、花をルーペで見ると、やはりよく似ている。

シマスズメノヒエの穂を、ルーペで見ると面白い。柱頭ちゅうとう（おしべの先）はブラシ状で葯やく（おしべの先）と共に濃紫色だった。

今、ハルジョオンとヒメジョオンが一緒に咲いている。茎の中空（ハルジョオン）は分かりにくい。根生葉こんせいよう（ロゼット）が花時はなときまで残っていて、茎上の葉が茎を抱くようにつくのはハルジョオンだということだ。

ノイバラ、テリハノイバラも咲きはじめていた。

海岸近くのスイカズラは、金（黄）と銀（白）の花をたくさん咲かせていた。これはキンギンカ（スイカズラの別名）である。海にでると花も実をつけていたが、青々して食べられそうに見えた。

松林で、蕾をつけたハマカキランを発見した。キャンプ場では4本見つけることができたが、3本は頭を虫（アブラムシ？）にやられていて、今年は咲かないかもしれない。ハマカキランは年々減少しているようで寂しい。

キャンプ場内のハマボウフウは管理されていて、花も実も立派につけていた。「しおさいの森」に入ると、マンテマ、

ナギナタガヤ、フシグチガヤなど。ここに植えられた木が多く、足早に通り過ぎてしまう。

今日は暑くもなく爽やかで、鳥の声も聞こえて楽しい調査だった。

（東海岸南 石井準子）



アオダイショウ 2 題

●アオダイショウの木登り

80cmくらいのアオダイショウが地上3mくらいの梅の木をはっていた。6月中旬、梅の実をとって出て出くわした。アオダイショウは屋根裏まで登るのは知っているが、木の上で実際出くわしたのは初めてだった。

●アオダイショウの死がい

6月10日、家の前の道路で3～40cmのアオダイショウが死んで丸まっていた。車にひかれたのだろう。

その頃、20cmくらいの細い黒っぽいヘビを庭で2、3回見かけた。今年は大小のヘビをよく見る。

（香川 池田卓郎）

6月の小出川の花ごよみ

6月26日、Tさんと2人だけの観覧会でした。同行したTさんのいつも好奇心旺盛な観察姿勢に感心しながら、短時間でしたが楽しい時間でした。

小出川右岸の浜園橋から上流に行く予定でしたが、草が道にかぶさる程に茂り雨にしっかりと濡れていたもので、場所を変更して浜園橋から新湘南高架下の土手沿いを下流に向かって歩くことにしました。

この時期は花の咲いている草は少なく、ヘクソカズラ（別名サオトメカズラ）とセイヨウタンポポなどで、ウラジロチチコグサやマメグンバイナズナは種になっていました。マメグンバイナズナは、以前にも相模川の土手で多く見ていて、小出川土手でも見られましたが、今回のコースには、去年は無かったように思います。

雨が降って来たので「早く切り上げましょう」と言いながら、トベラやエノキの中で立派な木になっているアカメガシワの花が満開になっているので足を止めました。

「確か雌雄異株だね」などと言いながら、確認のために手を一杯に伸ばして少し花序をいただきました。その場で判断もできないまま足を進めました。少し歩くと、幸運なことに再びアカメガシワの花があり、先ほどの花と比較することができました。

この花にも花弁は無く、花柱は3個で、黄色の乳頭状の突起が密生していたので、雌株だと確認できました。最初の本の雄花は3mm位の花系を持つ多数の黄色い雄しべがぼんぼり状になっていて、すぐに比べることができて、「よかったね」と二人で大喜びしました。

今日のコースには、植栽のドウダンツツジなどに架かったタナグモ類の網が雨の雫で美しく見えます。網はあちこちで何段にも数えられ「蜘蛛の観察に良いよね。蜘蛛のマンションのようだね。」とお喋りしながら歩きました。

「小出川に親しむ会」が維持管理している場所でコムラサキの実を見て、新鶴嶺橋を渡ると、植栽されたウメやトウネズミモチなどがあり、その中でお目当てのセンダンを探しました。センダンは関東には自生しておらず、四国・九州・沖縄などに分布しているようです。涼しげな葉の様子や、花も可憐で香りも爽やか

なので好きな木のひとつですが、今年はまだ実になっていません。

新鶴嶺橋から中原橋までの短い距離にトウネズミモチが15本以上も植えてあり、満開で大きな花序をつけているのでこの時期は非常に目立っています。

上の方に咲いているので、手に取って見ることは出来なかったのですが、6月の柳島キャンプ場での観察会で、迷いに迷ったトウネズミモチとオオバイボタのことを思い出しました。どの木も花序が10cm以上もあるので、ここにはオオバイボタはないようですが、その違いをまたしっかり見直さなくてはならないと改めて思いました。

（浜之郷 河野正子）

ツバメの話

5～6月頃、ツバメについての小文を書こうと思っていましたが、何となく書きそびれ大変時期はずれになってしまいました。

以前は、茅ヶ崎小学校前の通りに、季節になると大変な数のつばめが南方10,000km余りのはるかかなたよりやって来て、巣作りする姿をよくみかけました。そして産卵、ヒナの成長を経て、8～9月初めになりますと、家族ともども南方へ帰っていきます。ご存知の通り、最近は建物もだんだん近代的なコンクリートづくりなどに改築されますと、巣作りに最適な場所が少なくなったように感じ、「かわいそうだなあ」と毎年見ておりました。

さて話は今年のことです。

サザン通りにありますとある商店の軒先に、4月の終わりごろでしょうか、ツバメの夫婦がやって来て巣作りを始めました。毎日、日中は巣作り用のワラ類あるいは小砂類を集めて一生懸命働いていました。登下校の時間になりますと、小

学生たちが巣作りをみておりました。

お店の人にききますと、蛍光灯の横に巣作りを始めたのですが、巣の下にはフンが一杯山積みになり、来客の迷惑になると困っていました。しかし店主の方が言うには、「私共で巣はこわしておりません。」とのことでした。

そのうちにツバメ夫婦の姿が全く見られなくなりました。店主の方に聞くと、「最近カラスがたくさんこの近辺にやって来たので、ツバメはこわがっていなくなったのでしょうか。」とのこと。そろそろ子ツバメが誕生する時期に近づいたのに、どこへ行ったのでしょうか。

しばらくして、異なるツバメがやって来て、同じ所に巣作りを始めたので良かったなあと思っていましたところ、またまたいなくなり、今度は巣もありません。先ほどお話ししたとおり、10,000kmはるかかなたより、日本をめざしてやって来て、子ツバメの誕生も近い頃になっていなくなってしまうとは、どうしたことでしょう。

茅ヶ崎市の南、あるいは北にてツバメの明るいお話はありませんでしたでしょうか。ありましたら、ぜひお聞かせください。

（中海岸 星野利行）



千ノ川にすみつくオオヨシキリ

2007年5月17日（午前5時45分頃）から2007年6月12日（午前5時30分頃）までの間、千ノ川でオオヨシキリを見ることが出来た。千ノ川の川底の湿地に生えるヨシ（アシ）は2mにも達しただろうか、道路の高さまで達している。

朝日が強く、アシの葉もきれいに輝いて見えた。その千ノ川のアシ原に、2羽のオオヨシキリがいて、1羽はアシの青い茎に止まりながら、「ギョシギョシ」と鳴いていた。もう1羽は、対岸のサクラや常緑樹の枝先に止まり、同じく「ギョシギョシ」という、オオヨシキリの特徴ある鳴き声を耳にすることができた。5月の初め頃から姿を見せていた。

（文化資料館 小室明彦）

アオダイショウ、モグラを飲む

7月18日（水）、午前10時15分頃。下寺尾の椎ノ木坂の西の竹林で、胴回りの太いところが3cm近くあり、長さは1mを越すアオダイショウが、長さ12.3cmのモグラを飲み始めている所に出くわした。



飲み込んでいるところ

〇氏は、危うく何か踏みそうになって、見てみると、それはヘビが丸くなっているのだと分かったとのこと。最初は「死んでいるのかと思った。」という。モグラはもう動いていなかった。

モグラの頭から飲み始めていたが、モグラの片方の前足はまだ口の外に出ていた。その足を飲み込むのに苦労していたようで、少し戻したりしていた。結局そのまま飲むことにしたようで、モグラに自分の胴体を二重に巻きつけ、口をさらに大きく開き、何とか飲み込むことに成功した。

巻きつけている時は、竹の枝も巻き込んでいたので、枝を引っ張ってみたが全体重がかかっていたためか、ちょっとの力では抜けなかったため、無理には動かさずにおいた。

竹の枝を巻きつけることで、モグラの骨を砕きやすくしたのかとも考えた。発見してから飲み込み終わるまで23分。モグラが入っていくと、ヘビの体が膨らむので表面が白っぽくなる。



飲み込み終わったところ
（写真撮影：文化資料館 須藤）

モグラの全身が口を通り過ぎるとあとはどんどん中を進んで、見ているうちに、あごから30cmくらいの所が膨らんでいた。その頃から、舌を出しながら動き出した。そのあと数分間見てなかったが、気づくともう姿はなかった。

モグラは先日、下寺尾の小出川近くの道端でもがいているのを見たが、大きさがヘビに飲まれたモグラと同じくらいなので、子モグラではなさそうである。

ヘビが大きい物を飲み込む時はアゴをはずすと聞いているが、上アゴ、下アゴ3cmくらいに開いて、ヘビの胴体より太いモグラを飲み込んでいたので、アゴがはずれていたのだろう。

※関連記事「アオダイショウ2題」（P6）

（香川 池田卓郎）

カワセミの親子4羽

2007年5月29日、午後2時15分頃、北茅ヶ崎橋を通過したとき、銀色に光る小魚をくわえ、下流へ飛んでいく1羽のカワセミを見た。そのカワセミを追いかけるように自転車で千ノ川の土手の右岸を走る。

しかし、川底には平らに積まれた土砂、さらに1m以上に伸びたアシで姿を見失う。新千ノ川橋付近でカワセミの若鳥（幼鳥）の甘える鳴き声を聞く。自転車を止めて耳を傾けると、その声は対岸からであった。対岸にあるコンクリート製の護岸から突き出た4本のさびた鉄パイプが糞で白くなっていた。数日間、ここで生活していたのだろう。

午後2時26分頃、その1本に親鳥の雄と若鳥2羽、もう1本に親鳥の雌が止まる。一旦家へ戻り、カメラで撮影したが、4羽を撮影することは出来なかった。若鳥2羽が、親鳥からの「雑魚」（「ざこ」と読む。小さな魚のこと。）をねだり、親鳥は、ヒナに見せびらかし、すぐ

に餌を与えていない。強いていえば、若鳥はお預けである。2、3度繰り返してから若鳥に雑魚を与え、ヒナもすぐには飲み込まず、親鳥の合図を待つかのようであった。

今度は飛び込みの練習である。水面には40cmほどのコイが背を出して泳いでいるが、雑魚の姿は見えない。しかし、若鳥は水面に向かって飛び込みの練習をしており、親鳥から飛び込みの仕方を教わっているようにも見える。

この日は、親鳥の雌雄と2羽の若鳥が観察できた。巣の場所はどこかわからない。4月頃だったと思うが、遠藤・茅ヶ崎線の道路に架かる千ノ川橋付近で、雌雄の求愛行動を観た。もしかすると巣穴はこの付近にあるのかも知れない。しかし、残念ながら巣穴になるような場所はない。巣立ち後、どこからか飛んできたものと考えられる。

この鉄パイプを止まり木にし、親鳥から生きるための色々な特訓を受けていたのだろうか。

翌日、同場所、同時刻に行くが、親鳥の雄が鉄パイプにいるだけだった。数日後、新千ノ川橋上流の茂ったアシは、コンバインで刈られて、見通しが良くなっていた。



（文化資料館 小室明彦）

藤の花の振り返り

毎年4月10～20日ごろになると、紫色のすだれをつくり、通行人に大人気の花であるが、8月16日、3カ所の枝にフジの花がついた。

最近の日中温度は、「34～5度もあるのに、「大変ご苦労さんです。」と声をかけたくなる。花は少なくとも、人の心を和ませてくれます。



（菱沼海岸 井川洋介）

テッポウユリ

菱沼海岸に、最近はやりのテッポウユリが咲き乱れ始めた。一本の茎に35個の花をつけたエネルギーギッシュな植物を見つけた。この暑さに耐え、がんばっていた。自然の植物のたくましさ之感服する。

1本の茎で35個の花を咲かせる強烈な遺伝子を持ったテッポウユリ。4～5年前までは、1本の茎に1個ないし多くて3個くらいの花をつけることが、過去に撮影した写真記録から判断できる。

今年はさらに多くなっているように見かける。35個の花をつけたのは初めてであるので、更に興味をもって茎の頭頂あたりの写真を撮影する。1本の茎と考えていたものは、どうも7本くらいの茎

の集合体で、頭頂部で葎笛のように平たくなり、35個の花を横に広げて咲かせていた。



（菱沼海岸 井川洋介）

【資料館コメント】

このテッポウユリは、帯化によって花をたくさんつけたようです。帯化とは、帯状に編みこむ現象です。特に植物の茎などにみられる奇形のひとつです。何かの刺激で茎の成長点の細胞が線状に広がるために起きると考えられます。

（文化資料館 小室明彦）

しぜんだより

●キリギリス

7月10日、ブナの鉢植えを剪定中に、体長5cmほどのキリギリス（オス）を発見しました。10年ほど前まで、芝生のススキの茂みの中で鳴き声を聞いたこともあります。ここ何年間か聞いたこ

とも姿を見たこともなかっただけに珍しく、確認の報告をいたします。

●アシナガバチ

例年、ケヤキやカエデの盆栽の枝に営巣していたアシナガバチが、今年も餌を探しながら飛んでいる。1、2頭の姿を見ることがあるが、盆栽やその周辺では営巣を見ていない。

一昨年は3個、昨年は5個確認しましたが、今年は今のところ0個である。このことは、盆栽や低い場所で営巣できないなどの、何らかの理由があるのだろうかと思念します。例えば、水害を起こすような大雨が降るとか…。昆虫の本能で、「今年の気象予測をしているのでは？」などと考えてしまいます。

（浜見平 伊藤信行）

コゲラの巣穴を発見 ～浜見平団地内にて～

2007年6月15日、午後5時45分から午後6時15分まで観察したものを紹介します。

浜見平団地、16街区西側の桜並木（サクラの木No.308付近）の建物側のサクラの枝にあるキツツキの穴を観察に行ってきました。浜見平住人の方から頂いた写真を頼りに、その現場にたどり着きました。写真の場所を確認するために電話をかけたところ、わざわざ来てくださいました。地面には木くずがたくさん散在して、キツツキがいるサクラの木がすぐにわかりました。

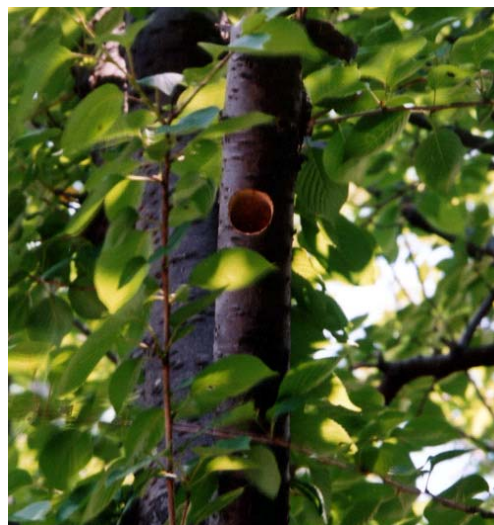
巣穴は、地面から約2m90cmの高さにあり、主幹から出た側枝の太さ（直径）は7cm、この側枝の長さは約2mで、その先は切られていました。入口の穴の直径は約4cm、巣穴の深さは12cmとあまり深くないことから、穴ほりの途中のようでもありました。この巣穴

の近くで聞こえた「ギーギギギ」という鳴き声と、巣穴の直径からコゲラのものであることがわかりました。今後もコゲラの巣穴である確認と巣づくりと子育ての実態を観察したいものです。

ちなみに、二種の剥製からアオゲラの肩幅は約6cmで、コゲラの肩幅が約3cmですので、アオゲラだとすると入口の穴の直径が6cm以上は必要でしょう。またアオゲラは市街地ではお目にかかることはありません。

数年前に、資料館敷地内にある朽ちかけのサクラの側枝に、コゲラの巣穴がありました。コゲラが巣穴から顔をのぞかせ、木くずを出していました。また赤羽根中学校付近の山林境の杭と、市外のマツの枯木で、コゲラの巣穴を1つずつ発見したことがあります。

コゲラの市街地への進出にはいくつかの因果関係があると思います。私は、山地や丘陵地の林から市街地への移動は、市街地が丘陵地の林と似た環境になってきたためであろうかと考えます。そして大気の汚れや枝下ろしなどで枯れ、朽ちやすい樹木（サクラ、マツ）も出てきました。さらに害虫の発生により格好の餌場となり、枯木が巣穴づくりに利用されるようになってきていると考えます。



浜見平の巣穴

（資料館 小室明彦）

台風9号

今年の台風は九州方面に来る事が多かったが、9月に入ると関東に来た。

9月3日の新聞に、気象概況として台風の情報が出ていた。その後3日間は、ゆっくりと西に向かい、次第に関東に近づいて来た。6日午前9時頃、小笠原諸島付近を北上し、関東も暴風圏内に入った。その夜には関東か東海に接近する見込みとなり、大雨警報が出された。

6日午前9時時点の位置は、青島の南320キロ、気圧は965ヘクトパスカル。八丈島での瞬間最大風速は47.7メートルにも及んだ。各地の被害情報もテレビで報じられていた。

八丈島から一直線に北上し、東海から関東に向かっていった。出来れば避けて欲しいと思う。

6日の午後2時頃、小田原市に上陸したという。この辺を通過する台風は斜めに通るのだが、今回は北上へと突き進んでいた。

小中学校では下校を早めたりした。伊勢原市では、小中学校が翌日の休校を決めた。横浜駅西口ダイヤモンド地下街は浸水防止の土のうを組み、八景島も営業を止め、東京湾フェリーも運休した。箱根ロープウェイ、駒ヶ岳ロープウェイも運休した。茅ヶ崎市では公民館に避難所を開設した。

南伊豆町石廊崎は風速54.6キロを観測した。交通機関も東京-名古屋が運休した。

東京へ通う人は、少し早めに家を出たが、東海道線は藤沢で止まり、小田急線に乗り換えて会社に行く。午前中、東海道線は運休し、午後になって運転を再開した。

長野県軽井沢町では245ミリ、静岡県伊豆市は352ミリ、奥多摩小河内ダムは417ミリ、安中市は370ミリを記

録した。

その後、台風は北上し、中心が仙台市の西を通り、さらに秋田県から青森県の西を通り、8日の夕刻にはオホーツク海に抜け温帯低気圧になった。

小出方面では、浄見寺の北の道端の大きなニセアカシアが2本倒れた。田名の無量光寺は山門の棒が倒れ、山門を傷めた。また相模川の増水のため、茅ヶ崎市では968人に避難勧告が出された。また5,163世帯が停電した。中海岸では、サイクリング道路が80メートル流出し、小中学校が臨時休校となった。

開成町では十文字橋が途中へこみ、通行止めになった。

（若松町 樋田豊宏）

神奈川県に上陸した台風9号

台風9号は南湖～柳島の海岸に大量の木材、木の根、わらを打ち上げた、当日は東風が強かったせいもあり、平塚市内を流れる花水川から大磯よりの海岸も同様な被害にあった。

茅ヶ崎市で最も問題な地区は漁港の東側、中海岸、ヘッドランドの東側から白浜町にかけての海岸地域である。この海岸には津波に対する堤防として約2,000トンの砂をサイクリング道路に平行して盛ってある。この盛り砂の80%相当の砂が、一夜にして江ノ島海岸方面に流失した。

漁業で生計を立てている人たちは大変だ。船が崖の上におかれたような状態で漁ができなくなった。特に中海岸の漁師さんは、物置小屋まで破壊を受けた。

9月15日（土）、市主催による海岸清掃が行われた。

海岸で漁協の組合長さんと茅ヶ崎海岸の砂の流失を止める手段について話し合っていたところに、服部市長がゴミ袋を手にとって来られた。

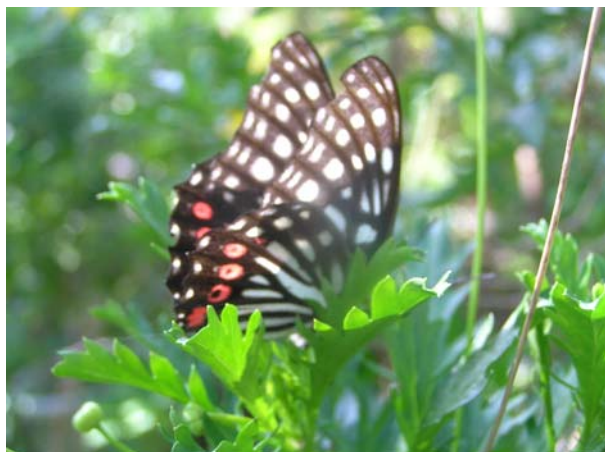
組合長より、「緊急の工事依頼に対し大変お世話になりました。」と挨拶があった。かつて添田元市長が在任中に、台風の被害があった海岸を視察しているところにお目にかかったことがある。



菱沼海岸のサイクリング道路付近
（菱沼海岸 井川洋介）

アカボシゴマダラ

9月9日、菱沼海岸の自宅付近の道路に美しいデザインの蝶が止まっていた。暑さに弱っていたのか、そっとつかんで近くの生垣に止まらせた。5時間後の昼ごろ、思い出してデジカメを持ち出した。



蝶は再びアスファルトの上に落ちていた。持ち帰って草花の上において撮影し、Kさんにメールで判断を依頼した。中国に住む種類で、人為的に国内で繁殖したものだという意見をいただいた。早速、その日のうちに平塚博物館の浜口館長に

もメールし、情報提供したところ、折り返し、「最近では藤沢、横浜南部にも「繁殖が見られる。」との情報をいただいた。

（菱沼海岸 井川洋介）

ノビタキ

10月2～3日にかけて、寒川の農耕地で4、5羽の夏鳥のノビタキを見ました。

今、ノビタキは、渡りの途中で、各地の農耕地や河川敷で一時的休憩をしているようです。

9月下旬には、野鳥調査をしていた山翠会の樋口さんが、西久保の田んぼにいたノビタキを写真に撮っています。

寒川の農耕地には、雌雄^{しゅう}でいます。わりと人目につきやすい高いセイタカアワダチソウのテッペンに止まったり、ススキのテッペンに止まったりして、近くまで接近してくれるので、写真は撮りやすかった。

もうすぐ冬鳥たちが、渡り来る時期にもなりました。香川・下寺尾の調整池に、3羽のチドリやタシギ、コガモなどが来ています。

10月2日に西久保の小出川に、1羽のマガモが来ているとの情報を聞きました。



ノビタキ

（香川 目黒啓子）

小出川の花ごよみ

9月24日、いつもの浜園橋から上流を歩きました。

イシミカワが他の雑草とからみ合っている間から「私の美しい実も見て！！」と言わんばかりに、あのトゲトゲの茎を他の植物にからませて一番目立つところに這い上がり、まだうら若き青い実を沢山つけていました。もう少しすると、藍色や紅紫色の美しい色に変わってブローチにしたいくなる様な実になるでしょう。

ゲンノショウコの白い花も咲いていました。

ちょっと前までは、なんとなく暗いイメージが強かったヒガンバナですが、最近では、ちょっとした人気の花になっているようで、土手にヒガンバナを積極的に植えているところも多いです。考えてみると、他の花とはいろいろ変わっているところが多い花ですね。毒があり、花が咲くころには葉がなく、花もなんとなく妖艶な美しさをもっていて、不思議さがいっぱいという感じです。その毒がある球根も、大飢饉の時は何回も水にさらして毒を抜いてから食べたという記録が残されているという事で、人間の智慧にもびっくりです。

ヤブツルアズキの黄色の花をみつけました。この黄色の花も少し変わっています。中の花びらが、まるで出来損なったようにねじれているのです。なんでこんな形をしているのでしょうか。青い細長い実も出来ていました。これが私の大好きなあんころ餅のあん（あずき）の原種だということです。ありがたいことです。この花のお陰で私の胃袋が喜んでいるのですから。

つゆ草の群生しているところがありました。雨上りの明るい陽ざしに、心洗われる様な清楚な美しさが漂っていました。

地味ながらカゼクサ、シマスズメノヒ

エ、アレチウリ、ヨシの穂、エノコログサ、キンエノコロ、ウィーピングラブグラス、セイバレモロコシ、ネズミノオ、カントウヨメナ、シロノセンダングサ、アキノノゲシ、オオオナモミ、アカツメグサ、マメアサガオ、シロバナサクラタデ、ツルフジバカマ等の花たちが楽しませてくれました。

今日は、もう1つ楽しませてくれるものがありました。私たちの歩く先々にバツタがピョーン、ピョーンと2～3,4～5頭位ずつ飛び立つので、つい私も一頭ぐらい捕まえてやろうという気になり、トノサマバツタを捕らえようとしたのですが、逃げ足の速さに負けました。しかし、ショウリョウバツタを捕まえることが出来ました。もちろんすぐに逃がしてやりました。

久しぶりに秋を楽しみました。

（円蔵 高橋静子）

ノビタキ

9月13日（木）、文化資料館の入口前の地面に止まっていたノビタキを手で捕まえました。羽の模様などを観察してから離すと、エントランス脇のスイフヨウにしばらく止まり、どこかに飛んでいってしまいました。

体全体の模様、体色からノビタキかと思われれます。夏鳥のノビタキは、秋の渡りの頃によく見かけられます。



（文化資料館 須藤 格）

Column

コラム

アメリカトゲミチク

アメリカトゲミチクは、斉木操さんが1982年9月23日に神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬で、わが国最初に採集した。その後、1999年11月16日に松本雅人氏により横浜市の瀬谷区と中区で採集されている。

この植物は、『中国高等植物図鑑』によれば、雲南省昆明に帰化していると記されている。

私は太平洋戦争の頃、大蓮に住んでいた。昭和20年ごろ、時々四川省の成都付近からアメリカのB29爆撃機が大蓮に飛来してきた。また、終戦後1週間くらいして、ソ連軍の機械化部隊が突入してきた。戦車部隊と共に、物資を輸送するトラックが同行してきたが、それもアメリカ製だった。また中京の部隊が入ってきたとき使っていたジープもアメリカ製だった。

これらのジープは、アメリカが蒋介石軍に贈ったものである。また日中戦争時、アメリカはフランス領インドシナのサイゴン（現・ホーチミン市）を通じて、蒋介石軍に援助物資を送っていた。そのような物資に付着して、アメリカの植物が中国奥地に運ばれたのだと思う。アメリカトゲミチクもその一つであろう。

植物の研究をするときに、合わせて社会情勢にも目を向ける必要があると思う。

（藤沢市藤が丘 小原 敬）

リンゴの品種名「インド」の由来

朝日新聞の元論説委員である増子義孝氏が、インドのニューデリーでリンゴの品種「インド」を探したところ、日本で「インド」と呼ばれているものとは全く

別物であったという。

同氏が帰国後に調べたところ、青森の東奥義塾で英語教師をしていたアメリカ・インディアナ州出身のジョン・イングという牧師が、アメリカから持ち込んだものとわかり驚いたとのことである。

青森の果樹栽培者は、このリンゴを栽培するのに非常に努力を重ねられたと聞いている。

（藤沢市藤が丘 小原 敬）

黒潮の運んだ海外土産

日本本土に漂着する海外からのごみの変遷。

私のごみの漂着記録（茅ヶ崎海岸）を作って20年近くなります。時代を振り返って20年から15年前に記録した国を調べると、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、フィリピン、中華人民共和国、台湾、韓国等の国々からの生活ごみが多かった。その後、10年間は目っきり生活ごみの量が減った。潮の流れの変化が現れ始めたかと神経を尖らせていたが、その間の中国の経済発展が強く影響して、紙不足のため各国で資源のリサイクルに関心を強めているのではないかと想像を強めるにいたった。

今日に至るまで、太平洋沿岸に流れ着く紙パックの量は、過去の1%くらいに減っているのではないかと、最近のデータに照らし合わせて考える。漂着物の写真を紹介いたします。これらの漂着物の多くは日本近海で船からの海上投棄物ではないかと想像されるものが多く見えます。考え方としては海藻、エボシガイ、フジツボのような付着物があっても、その数はわずかであるからです。皆さんはどのように考えますか？

井川氏が収集した漂着物



紙パック（中国？）



紙パック（中国？）



ジュースのパック（ロシア製）



ジュースのパック（トルコ製）



上海とかかれたポリタンク

（菱沼海岸 井川洋介）

茅ヶ崎の小さな森 ～社寺林調査～

ふるさとの森

人類の歴史は、自然開発の歴史でもあります。我が国でも2000年以上前に稲作が伝来してからは、森を切り開き、水田や畑、そして道路や集落をつくってきました。しかし、私たちの祖先は森を全て切り開いたりはありませんでした。開発に際し、必ずふるさとの木によるふるさとの森を残し、守ってきました。そのようにして残されてきたふるさとの森が、お寺や神社の鎮守の森です。鎮守の森では、カシやシイなどの広葉樹が古くから育まれ、大きな木が多いことが特徴です。

茅ヶ崎の大地と郷土の森

茅ヶ崎市は全国でも有数の砂丘地形で

す。かつて海であったところが少しずつ陸にかわり、新たな大地が広がる中で、人々は土地を開拓してきました。水田や畑などの農耕地が広がり、集落が大きくなると、人々は集落の中や周りに、八幡宮やお稲荷さん、権現さん、寺院などをつくり、祖先などを祀ってきました。さらに、その場所は神域もしくは聖域として、むやみに足を踏み入れないようにしてきました。そのため、土地本来のふるさとの木で構成された森が残されてきたのです。

34年ぶりに

文化資料館では、今年度34年ぶりに市内の社寺林調査を行います。これは昭和48年に、神奈川県教育委員会が実施した県内の社寺林の一斉調査以来のことです。

年末年始、七五三、お盆などで地域の人々が訪れる、身近な鎮守の森を知ること、現在の環境や社会の問題などを考える上で、大きなヒントになると考えます。

市内には32の神社と42の寺があります。今回の調査結果からみえてきた、市内の小さな森である社寺の多様な自然を本紙で紹介していきます。

※『広報ちがさき』2007年6月1日号に掲載しました記事と同じものです



腰掛神社（芹沢）

（文化資料館 須藤 格）

Information

案内

おしらせ

●「茅ヶ崎自然に親しむ会」

『円海山～横浜市最大の沃地に触れる』

日時：11月18日（日）

『平成19年度総会』

日時：12月16日（日）

問い合わせは、

安井利子（52-3856）まで

●「清水谷を愛する会」

日時：2008年1月20日（日）

2008年2月24日（日）

各日とも9時30分～15時

集合場所：市民の森駐車場（堤）

問い合わせは、

田部許子（51-2955）まで

●「柳谷の自然に学ぶ会」

『冬の谷戸をみよう』

日時：12月9日（日）

『冬鳥をみよう』

日時：2008年1月27日（日）

10時～12時

集合場所：県立里山公園 風のテラス

問い合わせは、

野田晴美（51-8489）まで

●「三翠会」

三翠会では、市内の川や水辺の生きもの調査やタゲリをはじめとする野鳥観察、お米（タゲリ米）づくりのお手伝いなどに取り組んでいます。ご協力いただける方は、下記までご連絡下さい。

事務局：河村まき子（87-8313）

●「駒寄川水と緑と風の会」

『駒寄川を下る』

日時：12月2日（日）

『水質検査と懇親会』

日時：2008年1月6日（日）

『バードウォッチング』

日時：2008年2月3日（日）

各日とも13時30分から

集合：民俗資料館（旧和田家住宅）

問い合わせは、

池田尚子（52-8919）まで

記事募集！

「自然の新聞」では、みなさまからの投稿をお待ちしております。メール、FAX、手紙等でOKです。

FAX：0467-85-1733

メールアドレス：

shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp

鎮守の森の調査

鎮守の森といわれる社寺林は、社寺境内の特性ゆえ、その地域本来の植生などが保全されていると考えられています。

文化資料館では定期的に勉強会を開き、調査を市民の皆さんと協力して実施していきたいと考えておりますので、ご興味のある方は文化資料館（0467-85-1733）までご連絡ください。

